

第三章 名詞

吾々の五感に接觸することの出来るものと、理解力を以て知覺することの出来るものとを問はず、總べて物事の名稱として用ゐられる體言を名詞と云ひます。例へば「人」「馬」のやうに目で見ることの出来るものも、「氣候」「暑さ」のやうに皮膚で感ずることの出来るものも、「音樂」「聲」のやうに耳で聽くことと、出来るものも、「味」「旨さ」のやうに舌で覺ることの出来るものも、「幸」「禍」のやうに理解力で知ることの出来るものも、皆名詞であります。從來は此の名詞を種々に分類致しました、有形―無形、普通―固有、部類―物質、單獨―集合などと種々に分類致しましたが、多くは單に西洋文典を模倣するのであります。何等の意味もないのであります。西洋の言葉では名詞の種類に依りまして、語法に特別の約束を生じますから、特に之を説く必要もあるのですが、日本に於きましては、少しもさう云ふことがありませんから、くどくしく分類する必要を見ないのであります。依つて名詞の分類に關することは一切省略いたします。

第一節 敬語法

我が國語では目上の人又は其の人に關係した物事を云ふときには尊敬したものをを用ゐ、自分又は自分に關した物事を云ふときには卑下したものをを用ゐるといふことは前にも申上げた通りありますが、名詞に於きましては、多くは或接頭語を附け、または或接尾語を附けて尊敬を表すことになつて居ります。今其の接頭語・接尾語を文語・口語に分けてお話して見ませう。

文語の接頭語

文語の尊敬の意を添へる接頭語の主なものはおほ大「み(御)」「おほん」「おん(御)」「お」ご(御)などであります。

おほ大	— 神	— 君
み(御)	— 靈	— 位
おほみ(大御)	— 言	— 世
おほん	— ぞ	— 歌
おん(御)	— 姿	— 劔

お(御)

―前

―もの

ご(御)

―神事

―料

此の中で初めの「おほみ」の二つは和訓の接頭語の根本でありまして、此の二つが合して「おほみ」になり、「おほみ」が轉じて「おほん」になり、「おほん」が轉じて「おん」になり、更に轉じて「お」となつたのであります。「おほみ」「おほん」は普通文には餘り用ゐませぬ。「おほん」は中古文に限るのですが、説明の便宜上出したのであります。夫から「お」も口語に多く用ゐられるためか、文語にはあまり用ゐられないで、「おん」と「ご」が最も屢々用ゐられます。字音の接頭語には「尊」「貴」「高等」の如きものがありまして、「尊體」「貴札」「高評」などと用ゐます。又「愚」「鄙」「微」「弊」「拙」等の如きものもあります。これは「愚父」「鄙見」「微意」「弊家」「拙宅」などと用ゐまして、専ら卑下する場合に用ゐられるのであります。

口語の接頭語

次に口語の尊敬の意を添へる接頭語の主なものには「おみ」「お」「御」「ご(御)」等てあります。

おみ

―足

―帶

お(御)

―宅

―手紙

ご(御)

―親族

―近所

此の中で「おみ」は「おほみ」の轉じたのでありまして、其の用法は甚だ限られて居ます。本居翁も「玉勝間」の十四卷にかう云ふことを云つて居られます。

今の俗には物を書きては「御」の字を「おん」といへども、口語にては「お」とのみ云へり。まれゝに「おみ帶」「おみ裕」「おみ足」など云ふことのあるのは「大御」と云ふ古語のたまゝ残れるなり。

して見ると云ふと「おみき」「おみや」なども「大御酒」「大御屋」であつて「みき」「みや」に「お」の附いたのではないのでありませう。「酒」は古語に「白」「黒」などと酒と云ふ意味に多く用ゐてあります。併し「おみおつけ」などと云ふのは「おつけ」と云ふのを唯の語として、それに「おみ」と云ふ接頭語を附けたものであります。それから「お」は唯尊敬の意を添へるばかりではなく、又物事を優美に言ふに用ゐられることがあります。例へば「馬」「車」「膳」「腕」の如き類であります。

次は接尾語の方に移ります。文語の尊敬の意を添へる接尾語のおもなものは「どの殿」「さま様」「きみ(君)」「うへ(上)」「ご御」「せんせい(先生)」「くん(君)」「しうち

(氏)等であります。

どの(殿)

少佐――

武田――

さま様

公方――

徳大寺――

きみ(君)

兄――

姉――

うへ(上)

父――

叔父――

ご(御)

母――

弟――

せんせい(先生)

貝原――

本居――

くん(君)

山田――

川村――

しうぢ(氏)

大原――

本田――

此の中で、どのは元は高貴の人の住ふ宏壯な家をいつたのでありますが、轉じては高貴の人の稱呼に用ゐ、次いで従者が主人を指し、又は妻が夫を指して云ふに用ゐ、それと共に接尾語として人を尊敬するにも用ゐられることになつたのであります。「さまは元は西」「東」「土御門」「初瀬」のやうに、方角を示す接尾語として用ゐられたのであります。が、室町時代の前後から致しまして尊敬を表す接尾語として用ゐられることになつたのであります。

ます。「きみ」は至尊の御上を申し上げるのが原義でありませうが、一般の人の尊稱にも用ゐる接尾語としては「天邑」「阿多」「猿」「阿蘇」のやうに氏の姓として用ゐられ、次いで一般に用ゐられることになつたのであります。それから「うへ」は、申すまでもなく、下に對する上の義でありますが、中古では至尊の御上を申し上げると共に廣く婦人の稱呼にも用ゐる接尾語としては、「京極」「宰相」「葵」などの如く、多く貴婦人の稱呼の下に附けて用ゐたのであります。後になつては總べて目上の人の稱呼の下に附けることになつたのであります。次に字音の接尾語の「ご」は中古に「少將の」「伊勢の」など婦人の尊稱として用ゐたものが轉じたので、今は他人の近親を表する名詞に附きます。「せんせい」「きみ」「しうち」は姓名を表す名詞に附く接尾語でありまして、別に説明を要しませんが、「先生」は古く「せんじやう」と讀んだもので、既に皇極紀にも此の接尾語が見えて居ます。又「しうち」と云ふ接尾語が第三者として云ふ場合にのみ用ゐると云ふことも注意すべきことであります。

尊敬を表す接尾語には尙此の外に「陛下」「殿下」「閣下」等もあります。「陛下」は天皇・太皇太后・皇太后・皇后に、「殿下」は其の他の皇族に申し上げ奉り、「閣下」は親

任官勅任官有爵者の官名・爵名の下に附けて用ゐるのであります。

口語の尊敬の意を添へる接尾語の主なものとは「どの(殿)」「どん」「さま(様)」「せん」「せんせい(先生)」「くん(君)」などであります。

どの(殿)

中隊長――

事務官――

どん

番頭――

政――

さま(様)

宮――

旦那――

さん

叔父――

正雄――

せんせい(先生)

林――

鈴木――

くん(君)

上野――

濱田――

此等に就きましては別に説明を要しますまい。唯「どん」は地方に依つては普通でない所もありませうから申し上げますが、これは多く商店の雇人同士に用ゐる接尾語であります。また文語の接尾語の所で申しました「陛下」「殿下」「閣下」等は矢張口語にも用ゐるのであります。

第二節 名詞の數

名詞の數

名詞の數ひ即ち單數・複數ひのことは西洋の言語に於ては極めて大事な事柄であるのですが、我が國語に於ては至つて輕微な事柄であるのであります。即ち西洋では物事の單複に依つて其の語の形が變るのですが、我が國に於ては物事が幾つあらうと其の數に係りませぬ。例へば「机の上に白墨あり」又は「机の上に白墨がある」と云つた場合に、白墨が一本あるのだから數本あるのだから分らぬ。一本あつても數本あつても唯「白墨」と云ふのであります。けれども時と致しましては同じ名詞を疊み、複數の接頭語又は接尾語を附けて複數を示すことがあります。

名詞の疊語

先づ同じ名詞を疊む法に就いて申しますが、總べて同じ語を疊む法は世界至る處の原始的言語に廣く用ゐられたのでありまして、名詞を疊んでは「人々」「國々」のやうに複數を示すに用ゐられ、動詞・形容詞・副詞等を疊んでは「飛び飛ぶ」「遠々し」「いと／＼」などのやうに語勢を強めるに用ゐられるのであります。處が口語に於きましては、名詞を重ねて複數を示すと云ふことは「人々」「國々」のやうな慣例のあるのは特別、さもないものはだん／＼と消滅してしまひまして、「度々」云つた「所々」讀んだ「のやうに副詞を表すことが却つて多

文語の接頭語

くなつて居ます。これが文語・口語相互の異つた點であります。

文語の複數を示す接頭語のおもなものは「もろ(諸)」「しよ(諸)」「た(多)」「しゆう(衆)」などであります。

もろ(諸)

―手

―肌

しよ(諸)

―國

―大名

た(多)

―年

―病

しゆう(衆)

―人

―説

「もろ」は「人」などと云ふ例を除きましては「肌」「手」「膝」「刃」等の如く、多くは相對するものの二つを表し、其の他のは總べて多數を表すのであります。かう云ふのは口語には至つて少くて、時に文語を混じて云ふ時に用ゐられる位なものであります。

文語の接尾語

文語の複數を示す接尾語の主なもの「たち(達)」「ら(等)」「ども(共)」など「など」「どう(等)」等でありまして「たち」「ら」は人を表す名詞に附き、「ども」「など」「どう(等)」等は人又は其の他の物事を表す名詞に附きます。

たち(達)

宮―

親―

ら(等)

爺オキナ |

少女オトメ |

ども(共)

娘 |

珍しき木 |

など(等)

下部 |

雉子 |

此等の中には「友だち」「公だち」「子ども」などのやうに、複數の意の失せたのもあります。

口語の接尾語

口語の複數を示す接尾語の主なものは「がた(方)」「たち(達)」「ら(等)」「ども(共)」など(等)等てあります。其の中「がた」は尊敬を表し、「たちは」親愛を表し、「ら」「ども」は唯の複數を示す接尾語で、共に人を表す名詞に付き、などは人又は其の他の物事を表す名詞に附きます。

がた(方)

宮様 |

華族 |

たち(達)

兄さん |

姉さん |

ら(等)

子供 |

小僧 |

ども(共)

男 |

女中 |

など(等)

女 |

筆 |

複數の意義

以上述べました所は我が國語の複數を示す方法の大要でありますが、茲

に注意を要しますことは、我が國語の複數には二つの意義があると云ふこととあります。即ち(一)同じ物事の複數を示すもの、(二)他に異なる物事の包含されて居ることを表すもの、此の二つであります。前に述べました諸種の方法の中で、同じ名詞を疊んだもの、及び複數の接頭語を附けたものは皆同じ物事の複數を示しますが、複數の接尾語を附けたものの中には他の物事の含蓄されたことを表すことがあります。「など」「等」の附いたものは常に之を表すのであります。例へば

少女||歌を歌ひつゝ行く。

お子||さんたちも連れて入らつしやい。

の「ら」たちは二人以上の「少女」二人以上の「お子さん」のあることを表すので、所謂同じ物事の複數を表すのですが、

友則・貫之・躬恒・忠岑||古今集二十卷を撰ぶ。

あの店には紙や筆や墨||などを賣つて居る。

の「ら」などは友則乃至忠岑以外の他の人の居ること、筆紙墨の外に尙他の物のあることを示すので、所謂他に異なる物事の包含されて居ることを表す

我が複數を示す法の不備

のであります。

兎に角我が國語に於きましては、數を表す方法が全くないではありませんが、同じ名詞を疊むもの、及び複數の接頭語を附けるものは、其の應用に限がありますし、複數の接尾語を附けるものは、其の應用が比較的自在でありますけれども、之を附ければ悉く複數となるかと申しまするに、必ずしもさうではありません、唯語意を模糊たらしむるために附けることも多いのです。そこへ行きますと、西洋の言語は單複の區別が判然と知れて、餘程精密のやうであります。けれども其の區別は唯一つと二つ以上の區別を示すに止まつて居ります。或國語にはデュアル (Dual) と云つて、二つと三つ以上とを區別するさうであります、が、それでも三箇以上の區別は出来ませんから、語法上の形式で數を示すことは甚だ微少であります。我が國語でも「白墨」と云つた丈では數は分りませんが、殊に數を示す必要のある場合は「白墨三本」あまたの「白墨」などと云へるのでありますし、又數の區別のない丈に、語法が西洋の國語のやうに煩雜でありませんから、さう歎くにも及ばないのであります。